

- [第8回大会を終えて\(鈴木庸裕〔福島大学〕\)](#)
- 課題研究分科会報告
 - [第1分科会\(荒巻 智之\)](#)
 - [第2分科会\(水流添 綾\)](#)
 - [第3分科会\(坂口 伊都\)](#)
 - [第4分科会\(長沼 葉月\)](#)
- [大会に参加して\(1\)\(矢吹保男\)](#)
- [大会に参加して\(2\)\(青木裕貴・川俣将成・高品柗野\)](#)
- [大会に参加して\(3\)\(浦田雅夫\)](#)
- [「地区世話人会」報告\(佐々木千里\)](#)
- [「院生・学生の集い」報告\(阿部志織・佐藤貴・渡部夏奈\)](#)

第8回大会を終えて 福島大学 鈴木庸裕

大会前後に福島や東北の被災地をめぐる方も少なからずおられたようです。そういったお誘いやオプションの企画をまったくつくることなく、復興、震災をあまりつよく押し出すこともない大会運営でした。被災地が抱える課題について、参加された方々自身に気づき、感じ取っていただければという思いでした。災害は継続中であり、まだ総括の渦中にあります。参加者は272名で、学会会員(院生含む)が170名、県や市町村の教委、学校関係者が54名、福祉・NPO・行政関係20名、院生・学部生28名でした。地元の教師たちも顔を出してくれました。

当日になって、足りないところに気づいて走り回ってもらうなど、いつもながらの「アバウト」な私の知らないところで、大会事務局のメンバーに支えてもらいながらの2日間でした。

さて、次年度第9回大会は関西地区の協力を得て、京都での開催になります。今後、大会実行委員会の発足などお手数をおかけしますが、よろしく願いいたします。

文末ながら、私事ですが、今研究大会の年次総会で承認を受け、学会事務局長を交代することになりました。学会発足時から会員各位の協力を得て、今では400名を超える学会の実務をやってきました。学会発足時は35名でした。その後も、どこでだれがどのような取り組みをされているのかなど、折に触れて情報をいただいてきました。手作業で入会や会員管理の実務、そして郵送物の発送などを何年もおこなっていると、学会会員の方々の住所や地名が頭に入ります。東日本大震災のみならず、全国で甚大な災害に見舞われる報道があるたびに、あそこには誰それがいたなあと頭に浮かぶことがよくあります。今思うと、震災直後、多くの会員からメールや電話をいただいたことを思い出します。

新事務局長、奥村賢一会員(福岡県立大学・本学会理事)、そして新たな事務局を支える幹事のみなさまへスムーズな引き継ぎをおこないながら、その一方で事務局実務の簡略化・簡素化も図りながら、後進に負担がかからないよう

に努めていきたいと思えます。今期より若手研究者に事務局長をお願いすることになります。会員諸氏におかれましては、是非、年度会費の早期納入など、物心ともに盛り上げていただけると幸いです。

課題研究分科会報告(第1分科会)

福岡県、北海道におけるスーパービジョン体制の報告を受けて
福岡県須恵町教育委員会・スクールソーシャルワーカー 荒巻智之

この度の分科会1におけるスーパービジョンの報告は、スクールソーシャルワーカー(以後、SSW)の配置促進、技術向上等々の為にはスーパービジョンが欠かせないと言う事の証明がなされたと理解しています。学校ソーシャルワーク研究誌第8号のSSW・SV体制の調査結果でもスーパービジョン体制をしている市町村が多数を占めている事が分かり、その必要性が全国的にも理解され、広がりを見せている事が分かります。SSWの配置と同時にスーパービジョン体制が構築される事を現場で働くSSWとして願うばかりです。私はスーパービジョンを受けている者として、学校内で一人奮闘するSSWの心の拠り所としてスーパービジョンが担えると思うのです。

さて、分科会の内容ですが、福岡県はスクールソーシャルワーカー活動事業の中にスーパービジョンを体系化しており、月1回程度実施されていました。また福岡県スクールソーシャルワーカー協会を立ち上げ、会員に対して研修会の開催や県内各市町村に対してスーパービジョンの必要性を周知していく取組みをしているとの事です。一方、北海道では道内を7つのエリアに分け、必要に応じてスーパービジョンを実施しているとの事です。また地域別研修会を開催し、スーパーバイザーからの専門性向上に向けた指導助言を受けているとの報告でした。

報告を受け、福岡県と北海道には「スーパービジョンの機能維持」の点で大きな差が生じている様に思えました。スーパービジョンの機能と言えば、1.管理的機能 2.教育的機能 3.支持的機能の3点が挙げられます。学校ソーシャルワークにおいては、日々多様化する社会問題(いじめや不登校等)に取り組む為の高度な専門性が必要となります。一人で多数の学校を掛け持ち過ぎて首が回らなくなったり、学校によってSSWの認識が違つて専門外の事を依頼されたりする事もあるのが現状です。上記3つの機能は、学校ソーシャルワークの質の向上・維持する為にも、また子ども達の権利侵害や社会不正義に取り組む為にも必要だと考えます。報告の中で「学校現場でソーシャルワークをどう展開して良いか分からなかった」「活動が上手くいかず歯がゆい」等といったSSWの声が挙がっていました。その声を聞くとある程度スーパービジョンを強制的にでも実施し、定期的に軌道修正してあげる事もスーパービジョンの機能から見ると必要な事ではないかと考えてしまう程です。

また今回、「スーパービジョンは誰の為にあるのか」を考える機会にもなりました。もちろん最終的には子どもの福祉の為と考えますが、その前段階としてSSWの葛藤があります。まだまだSSWの周知徹底が十分でない環境下において、一人ドンキホーテの様に立ち向かわされている状況もあると思われれます。一人で八方ふさがりの状況から打破するのは至極困難です。その解決の糸口の1つとしてスーパービジョンは存在していると思います。客観的に自身の状況を見てもらう事、そして指導を仰ぐ事は少なからずSSWの安心感や自信の獲得にも繋がります。どうか学校ソーシャルワークに介した全ての人の為にその恩恵が与えられるものあって欲しいです。

まとめになりますが、SSWは活用事業開始から6年目を迎え、導入期から発展期を迎えている所も多いと思われれます。これからがSSWの真価が問われてくると考えますが、今回この分科会から得られた情報や同じ気持ちで仕事を行う各県の同胞たちの存在を糧に日々の業務や研究に邁進していきたいと思いました。

課題研究分科会報告(第2分科会)

学校で行うアセスメントの意義と実際～他職種との違いを知り生かす～
大阪府教育委員会・スクールソーシャルワーカー 水流添 綾

本分科会は、スクールソーシャルワーカー(以下、SSWer)が学校で行うアセスメントの意義と実際をテーマに、活動形態、立場の違う三者に報告をいただくことで、それぞれの視点の違いを知り、協働へと生かしていくための議論が行われた。

まず、はじめは、福岡市教育委員会のSSWerの蒲池恵氏から、中学校区・拠点巡回型の取り組みについての報告をいただいた。小学校を拠点とし、週4日中学校区内での活動が行われており、地域に根付いた活動が展開されていると感じる報告であった。拠点小学校で開催されているSSW会議は、週に一回の頻度で、管理職をはじめ校内の主要なメンバーとSSWerが参加し、校内の子ども支援について検討されていることから、SSWerの存在が校内体制に根差したものとなっていることをうかがうことができた。もちろん、一足飛びにできあがったものではなく、日々の工夫や努力がなされたうえで、そのことは次の派遣型の報告と重なる部分も多くあったように感じられた。

二番目の報告は、大阪府教育委員会他、4つの自治体と雇用契約のあるSSWer、黒田尚美氏の派遣型の活動報告であった。黒田氏は、派遣型の最大の強みは「複数の学校、複数の事例を知っていること」として、強みを生かして広範囲に活動を展開されている。派遣型の場合、学校との関わりは、単発的であり、緊急を要する場合が多く、迅速な対応をするためにもアセスメント力を高めることが永遠の課題であると認識されていた。

この今回のテーマでもあるアセスメントについて、配置型、派遣型の両氏から、アセスメントは、SSWerが単独で行うものではなく、学校の教職員の中に、SSWerがメンバーの一員として加わり、協働でアセスメントすることが、有効な支援につながることを、活動形態に関わらず、教職員との関係性がケース対応にとって重要であることが確認できた。またチームの一員として協働していくためには、SSWerの活動の理解が不可欠であることもまた、両氏の発表の中で確認することができた。教職員との良好な関係性を構築していくことが、アセスメントに通ずる重要な第一歩であることが、両氏の報告に共通する課題であった。

3番目の報告は、いわて子どもケアセンターにて臨床心理士として活動されている三浦光子氏によるものであった。活動について語ることは、「震災という事実」を抜きには、語るができないとの発言からも、決して時とともに過ぎ去ってしまった過去の事実ではなく、今尚、現在進行形で考えていかなくてはならない事実であることを改めて、胸に刻むこととなった。平成7年以来、SCとして18年間、学校現場で子どもや保護者、教職員と向き合ってきた三浦氏の言葉は、聞く側に届く、わかりやすい言葉であると感じたが、その三浦氏の発表の中で、衝撃的であったことは、相互理解をしていくうえで、「言葉の問題」があるということであった。SSWerが日常的に活動の中で使っている“つなぐ”“ニーズ”“援助資源”なども、とてもわかりにくい言葉であることや、また“アセスメント”の意

味もSCとSSWerでは、意味が違ふということであった。お互いの使う言葉についての理解、そして専門性や役割の違いを理解することは、他職種との連携にとっても、第一歩であることが確認できた。

教職員やSCとの連携を阻む要素として、活動形態、時間、回数など物理的な問題はあるが、お互いのことを理解したうえで、各々違う立場からのアセスメントを融合するなど連携を深めることにより、幅広い支援が可能になることを実感する分科会となった。

課題研究分科会報告(第3分科会) いじめ、非行/暴力、虐待をめぐる研究事例 東大阪大学短期大学部 坂口伊都

司会進行より、課題研究第3分科会の趣旨説明があり、問題行動に関して積極的に支援を行っているスクールソーシャルワーカーの長澤氏と、長らく児童相談所で非行に重点を置いて活躍され、現在は学校支援にかかわっておられる渡辺氏の紹介が行われた。野田氏より、犯罪白書の資料を用い、成人の刑事司法手続きの流れと非行少年に対する手続きの流れの違いと、①14歳までの行為により、児童相談所先議と家庭裁判所先議の別れ、②触法段階での、要保護児童通告から家庭裁判所への継続が可能、③児童相談所と市町村の非行課題への役割活性化への方略、④出席停止しか持ち合わせない、学校の限界と連携の4点についての説明が行われた。

長澤氏は、京都府のスクールソーシャルワーカー(SSWr)活用事業のSSWrの活動方針は、「学校・教職員との協働を基本に『個別の課題を持つ生徒』の教育と発達保障のために、ソーシャルワークの専門性を用いて、必要な支援活動を行うとする」と定められており、「個別の課題を抱える生徒」は、生徒指導提要から用いられていられ、学校と共有していると説明。SSWrも含めて、学校においてひとつの支援システムとして機能していくように教職員と協働し、生徒本人の強みと主体性を大事にし、問題行動を本人と周りの環境との関係性(相互作用)から理解する視点、本人や周りが持つ「強み」と「力」を引出、本人の主体性を大切にする視点、つながりをつくり、社会資源、リソースを活用する視点、チーム支援体制を指向する視点を意識している。

続いて、事例があげられた。例)生徒指導担当教員からSSWrに、中学2年男子Kが卒業生Yと自転車盗で補導されたことが警察から学校に連絡があったと報告された。Kは欠席・遅刻が増えており、学校へ来たときも教室に入らず校内をうろつくこともあり、注意する教師にしばしば反抗的態度を示し帰ることが多いとのこと。

事例から、問題行動系の生徒を「個別の課題を抱える生徒」として支援の土俵に乗せる働きかけ、「毅然とした指導」の対象となりがちな問題行動系の生徒についても「個別に課題のある生徒」として学校が見ていけるように支援をしていると報告があった。

渡辺氏は、児童相談所の相談は、全国的には障害相談が半数を占め、非行相談は5%であり、児童虐待が増え、非行相談、不登校相談は等が減り、児童相談所の対応力が弱くなっている現況があると説明。Kくんの事例では、く犯行為等相談では親の相談意志がないとつながりにくく、警察からの触法通告があれば、手順通りの調査が始まり来所は8割程あるが、来所しない場合の強制力は使にくい。学校との連携を取る場合は、保護者の了解を得て行う事が基本となる。非行相談では、援助者との関係性、要保護性、非行の類型化と要援助性を基本に見立て、相談援助法を決定していく。援助者との関係性では、子どもだけではなく、親との関係性も捉え、それぞれのタイプによって変わる。

しかし、現状では児童福祉司の若返りによって、非行相談の見立てる力が落ちており、虐待対応からリスクアセスメントの訓練がされ、マイナス面をみる傾向がある。非行相談の見立ては、親や子どもとの関係性を重視したアプローチであり、これは長い実務経験から作り上げたモデルで、SSWrとSCの実践に役立つのではないかと考えており、両者の違いを理解し、連携、役割分担、共存が重要なテーマとなってくると報告が行われた。

課題分科会報告(第4分科会) キャンパスソーシャルワーカーと青年期 首都大学東京 長沼葉月

最初に、司会の米村氏より本分科会の位置づけについて説明があった後、西淀川高校のスクールソーシャルワーカーである寺本氏、多摩美術大学夜間部の事務職員/なんでも相談員の前田氏、日本社会事業大学のキャンパスソーシャルワーカー-瀬川氏から、現場で直面する青年期課題とソーシャルワーカーとしての活動の実践例についてご報告があった。

寺本氏は、高校では組織化された対応の場に入りこむ難しさを実感されたという。何か提案をしても、関連する各委員会が開催されるまで待ち、そこで合意が得られないと支援戦略を練り直さなければならなかったという。最初は「校長裁量予算」での配置であったため比較的自由に活動できたが、2年目以降は「キャリア支援予算」での配置となり、生徒と進路指導を糸口に関わることが多くなった。そこから対人トラブルや家庭の問題等の相談に応じているそうである。発達上の何らかの課題や知的な面での困難等を抱えた生徒も多く入学しており、そのような生徒への関わりを教員にコンサルテーションする機会も多い。問題が発生した後、今後の再発予防のために外部の専門家を招いて教員研修を行っていたり企画を設ける等の工夫もした。自立に向けて生徒の力を信じてそれを支えるようにしながら粘り強く関わっている様子が印象的であった。

前田氏は、夜間部の美大生の抱える課題として、不本意入学からの関わりからのスタートであること、学費や制作費が高額で経済的不安が強くそのためにマルチ商法等の被害に合いやすいこと、ビジュアル表現等が得意な半面、言語的にうまく説明できず困難ごとを訴えづらること、個別作業を中心に学べると思っていた入学しても実際にはグループ制作や講習会等があり他者との関わりで不安の強い学生には困難が大きいこと、等を挙げて下さった。学生は様々な課題を抱えているものの、教員は「やる気がないならやめてもらうしかない」という程度の理解にとどまっているとのことである。そこで事務室の前に立ち尽くしている学生にこちらから声をかけたり、「なんでも相談」という枠を設けることで相談への敷居を下げたりして学生のニーズを引き出し、その上で「学生さんがこんなふう困っていて、こういう支援があると授業に参加しやすいようです」と個別に教職員に働きかけたり、保護者への対応に先手を打ってみたい、悪徳商法については学生向けの講演会を企画したり、と様々な取り組みをなさってきたことが報告された。

瀬川氏からは、穏やかでまじめで気立てのよい学生の多い大学の中での支援の必要性を語られた。限られた勤務時間の中で、特に保健室や学生相談室カウンセラーと連携しつつ、個別相談と居場所づくりを主たる柱に据えて支援を展開しているという。対面相談とメールでのやり取りが多く、5月の連休後から相談件数が増加し、夏休みに減るものの後期に入るとぐっと増え、卒論や国試や就職の不安が一気に高まる11月、12月にピークを迎えるという実績も示して下さいました。大学生特有の課題として、他者からの評価にさらされ過剰適応的にふるまってきた学生が、息切れしたり、自分を見失ったりすることが多いという。本来の自分分からないということも多いため、ありのままの自分を見つめて、理解してくれるような人と出会うように、個別的な関わりと、居場所づくり活動から他者とつなげていくことを心がけているとのことであった。

いずれの報告の中でも青年期特有の課題として、「自己決定・自律の尊重」に向けて「自己(=アイデンティティ)」の確立の課題が関わっていることが改めて浮き彫りにされた。義務教育ではないため「保護されるべき子ども」や「教育の機会の保障」といったスクールソーシャルワークでしばしば前面に出される価値が必ずしも優先される訳ではない。個別のケースへの理解と学校コミュニティのアセスメントを的確に行いながら、学生の学ぶ権利や自分の人生を自分なりに考えて歩いていく権利を保障していくため、様々に取り組んでいるようすに、大きく励まされた分科会であった。

大会に参加して(1) 福島大学人間発達文化研究科院生 矢吹保男

JSSSW学会に初めて参加させていただきました。子どもの貧困が大きな話題となり、子どもを取り巻く環境が一層厳しさを増している今、原発事故で大きく傷ついた福島で開かれることにも大きな意義を感じます。大会前日の自主企画では、学生の皆さんと原発事故以後の福島の状況について話し合う機会がありました。福島に暮らす私たちの話に、学生の皆さんが真剣に耳を傾けてくれました。

大会二日間を通して特に印象深いのは分科会での真剣な協議です。研究の手法や発表内容に対して率直な意見がどの分科会でも述べられました。日常的に子ども達の危機的とも言える状況に立ち向かっているSSWr.及びその研究者としては真剣な協議は当然とも言えますが、参加された皆様の姿勢から多くのことを学ばせていただくことができました。

一日目の大会企画シンポジウム(テーマ「地域復興・生活再建にとって学校ソーシャルワークの役割は」)では岩手、新潟(福島からの避難先)、宮城、福島で実践される4名の報告者から、地域に根ざした活動の発表がありました。テーマの通り、復興と再建の途上にあるそれぞれの地域で、「地域」「学校」「家族」「協働」とは何かを問い直しつつ奮闘された実践ばかりです。発表を通して、「学校ソーシャルワーカーの役割」が明確に示されたと感じます。

大会では多くの研究成果と実践が報告され、明日からの活動に役立つ有意義な大会であったと思います。例えば、スクールソーシャルワーカーの再導入を検討している福島県K市教育委員会では、山野則子先生(大阪府立大)が発表された「全国調査における教育委員会とスクールソーシャルワーカーの実態」(自由研究発表分科会・第1分科会)を資料として取り上げているようです。また、シンポジウムや分科会を通して、「要保護児童対策地域協議会」(要対協)との連携に関わる事例が多く発表されていました。(第3分科会コメンテーター 野田正人先生もこのことに触れておられました。)被災地に限らず様々な厳しい状況にある子ども達を支援するSSWr.の活動の中に、要対協との連携の必要性を感じました。

大会に参加して(2) 帝京平成大学 学生 青木裕貴・川俣将成・高品柊野

今回、前日企画を含め学会を通じて数多くのことを学びましたので、とくに印象に残ったことを述べたいと思います。

まず、大会前日にあった自主企画では、大熊町SSW高瀬芳子さんの震災に対するお話を聞きましたが、“3.11のことを忘れるのではなく、どのように今後支援していくか”、“被災者と関わる場合、差別のないようにどのように接し、支援していくか(傷を少しずつ癒していけるか)”、“今回の出来事を日本人達に正確に理解してもらえるように努力すべきことは何か”、非常に考えさせられることが多く、表面的にメディアでしか震災について知り得なかった自分達の捉え方、考え方の狭さを大いに知る機会となりました。

次に大会事前企画にあった基礎研修では、ある事例においてどういった社会資源が周りにあり、メソレベルやミクロレベルではどういった社会資源の活用方法が検討できるかについてグループで話し合いました。それぞれのグループには、学生の他に現役の教師やスクールソーシャルワーカー(以下、SSWr)、医療関係者など、普段の大学の学びの中では、関わることでできない方々と学べましたが、このことは大いに自分達にとって学び深いものでした。しかし、それ以上に、大学生でありながらも社会人の方々と“対等”に話し合うという体験を得られたことはとても貴重な体験でした。まだまだ社会経験の乏しい自分達であっても対等に意見を出させていただけるという機会は、今後自分達がソーシャルワーカーになるにあたり重要な対人援助者のあり方を学べる場であったように感じます。つまり、学習内容以外の様々な面からも学びを得たと考えています。

最後に、本大会での発表において、朝日華子会員の「特別な配慮を要する定時制高校生のキャリア発達を促すための支援」を拝聴させていただきました。ここでは、人と普通の声量で会話をすることのできない生徒に対して、地域で就労を行なうことを通じ対人技能の習得に結び付けるというお話しでした。生活の困難を抱えている生徒のニーズに応えるためにSSWrが教員や地域と連携する姿から、自分達が専門職としてどのように連携をしていくか、そのあるべき姿を考えさせられました。また本学の先輩方も連名発表者として研究成果を発表していましたが、日々本当に研究に対して努力する姿を見ていましたので、それ以上に発表者の方々がいかに日々現場と向き合いひたむき(ときに果敢)に取り組んでいるかの姿を想像できました。

以上のことから、学会参加から、専門用語の理解及び自分の考えの深度などは浅い点が多く、改めて自分達の未熟さを実感した3日間でした。しかし、そのことから、自分達がソーシャルワーカーになるにあたり、様々な学びが必要であることの認識を深めさせられ、今では、勉学に励みたいという思いに変わっていることから、今回の学会参加が今後の自分達のあり方に影響を与えたことは少なくはないのではと考えています。

東北の地、それも福島へ向かうことは、個人的に大きな葛藤があった。あの出来事から、福島へ行くのは初めてであり、何もしていないという自責があったからだ。震災、そして原発事故は、関西では完全に過去の出来事となっている感がある。そして、そのなかに私の日々もある。政府は、またひとつ、またひとつと原発を再開しようとし、今までの生活を維持、発展させようとしている。あのとき、何があったのか。あの日、突然、信じがたいことが起こったときに、それでも他者の生活を支援した人から直接お話を聴いてみたいと思い、イブニングフォーラム(前日企画)から参加させていただいた。やはり、ここには「震災後」、「過去」ではなく、現在進行形で人々がさまざまな困難の前にいる。福島大学の鈴木氏が「がれきと汚染土壌の下に貧困がある」というように、ひとつひとつのなかに、もともとあった生活課題は、より深刻に複雑に、そしてあらたな課題も顕在化し、そこかしこに出現している。

大会初日、基調講演、シンポジウム、発表者の方のひとつ一言がどれも心に響いたが、とくに福島から派遣された教員、武田氏の思いや、提示された避難している小中学生の「心の健康アンケート」のなかで、「早くもとの生活にもどって自分の布団で寝たい」という避難児童の声が印象に残る。明日へ向かう力の源は、家庭での安心できるいつもの布団とあたたかい食事であろう。ほっと安心できる何気ないあたりまえの毎日が明日への希望につながる。あの出来事はあたりまえの毎日を子どもたちから奪ってしまった。あまりにも理不尽である。しかし、それでも、その理不尽さや困難な状況を前にした子どもたちと向き合う教員やワーカーのかかわりに心を打たれる。その活動に敬服するとともに地域再生の可能性を強く感じ願った。

二日目は青年期特有の課題や支援の実践について実践者から学んだ。複雑な家庭環境や貧困のなかで登校することさえ困難な高校生、親の意思を優先し自らを生きることが難しい状況に追い込まれた大学生等々、何れも、乳幼児期や児童期にありのままの自分を受け入れられたという感覚が乏しく、生き辛さをかかえている状況がみてとれた。「あなたはひとりではないよ」「ありのままのあなたでいいよ」という存在レベルでの肯定と、具体的な環境調整が求められると感じた。

次回ははいよいよ京都大会。どうぞ、よろしく願いいたします。

「地区世話人会」報告 日本学校ソーシャルワーク学会理事・京都市等スクールソーシャルワーカー 佐々木千里

本学会では、全国7ブロック(北海道、東北、関東甲信越、東海北陸、近畿、中国四国、九州沖縄)に世話人を配置しており、これまで各地区でも世話人が中心となって研修会や勉強会を実施してきています。そのような中で、各地区の世話人が何をしているのか、どういう役割を担っているのか知りたいという声があがってきました。そこで、今大会では全国の世話人が一堂に会する場を設定し、世話人の役割の共通理解や各地区での活動についての情報交流を図るべく、福島大会2日目の昼休みにランチョン世話人会を開いたところ、29名の世話人の顔合わせが実現しました。

現在、世話人会は各地区の会員から「地区世話人」を名乗り出たいただいた方々で構成されています。地区世話人には、1.地区ごとの会員同士の交流 2.研修会や勉強会の開催等によるSSWの発展と市民への啓発 3.SSWにおけるスキルアップや現任SSWrの活動の質の担保等、を図っていただいています。また、そのような取り組みの中で、さらなる会員の拡大につながっていくことも期待されています。

第1回目の今回は、この1~2年間での各地区の取り組み状況について交流しましたので、その概要や今後の予定を以下に紹介します。

- 北海道地区:年1回の研修会開催。2012年度に世話人として養護教諭への研修に対応した。
- 東北地区:『東北の学校ソーシャルワーク』の発行(第4号まで)、2013年度は福島大会実行委員会。第5回東北部会大会を冬に予定。その他各団体との共催研修等を企画、実施。
- 関東甲信越地区:学会主催研修会開催。地区世話人会開催。(今年度はin栃木を予定)
- 東海北陸地区:
 - 北陸地区…毎年1回、北陸3県持ち回りで研修会を実施する予定。(2012年度はin福井、2013年度は9月にin富山を実施予定)
 - 東海地区…2013年度は、10月に研修会in愛知を実施予定。その後、研修会in静岡も企画予定。
- 近畿地区:近畿地区研修会(2012年度はin京都とin兵庫を実施)。2013年度は近畿地区世話人会の予定(2014年度の京都大会の準備会をかねる)。
- 中国四国地区:2012年度香川大会実行委員会。今年度以降については、香川県に加え高知県等を巻き込みながら研修を企画予定。
- 九州沖縄地区:福岡を拠点にして、年に数回の研修会等を実施。2012年度は高等学校へのSSWrの導入をテーマに研修を実施。九州沖縄部会主催・学会共催で開催。

今回が初めての顔合わせだったこともあり、午後の部の開始時間ギリギリまで、世話人同士での会話がはずんでいる様子が見られ、世話人会の必要を実感すると同時に、ゆっくり交流していただくためには時間に余裕がなかったことを反省しました。次回以降の全国大会では、もう少し時間の設定を工夫した中で世話人会を設けていく予定です。

* 地区世話人に興味関心のある方は、地区担当理事までご連絡ください。

(各地区担当理事)

北海道地区(久能理事)、東北地区(高橋理事)、関東甲信越地区(高良理事)、東海北陸地区(佐々木理事)、近畿地区(野田理事)、中国四国地区(比嘉理事)、九州沖縄地区(門田理事)

今回、日本学校ソーシャルワーク学会・第8回福島大会の「院生・学生の集い」にて他大学の学生と意見・情報交換をすることができました。グループでの話し合いでは、私たちの大学は3年生中心でしたが、他大学の方々は4年生が多く、その方々のほとんどが本気でスクールソーシャルワーカー(以下、SSWr)を目指している方たちでした。そのような話をしている中で、私達は他大学の方々の福祉に対する想いの強さ、向上心の高さに驚きました。もちろんこれには、私達と違い社会福祉士の相談援助実習等を終えており、そこから得た経験からも、自分のしたい事はなにかが明確になっているという事が、福祉に対する想いの強さや向上心の高さに繋がっていたのではないかと感じました。

自分達がスクールソーシャルワーク(以下、SSW)を学ぶきっかけは、純粋な福祉の領域だけではなく、教育等様々な場で用いられている高度な技能を身に付けたいと思ったことがきっかけでしたので、本気でSSWrを目指している方たちの意見から出る想いや情報交換の意識のレベルはとても高いと感じました。そのため、各々が目標を持ち、学会に参加している姿勢に感化され、私たちもより一層、勉学に励み目標を持ち一步一步前進していかなければならないと感じました。とはいえ、学生同士であっても話し合いについていくことだけで精一杯というのが本音でした。

今回の集いの経験は、自分達がこれからソーシャルワーカーを目指すために必要な本気さを感じる大変貴重な経験であり、その温度差を肌で感じることから、知識だけでなく感覚からも多くのことを学べるよい機会であったと思います。つまり様々な大学(院)の方々と意見・情報交換し合うことの大切さを改めて知る機会となりました。

ところで、院生・学生の集いでは話し合いに適切な教室及び十分な時間の確保といった点にもう少し配慮があると、よりよい院生・学生の集いにすることが出来るのではないかと思います。また大学院生の集まりが少なかつたためこの分野の研究がまだまだであることも少し感じました。